

都市幼児の保育

清 水 桔 梗

目 次

- 一、都市の子供
- 二、都市幼稚園の保育
- 三、都市幼稚園の経営
- 四、むすび

一、都市のごども

初冬とはいうものの小春日和のように暖いある朝のこと、私はとある幼稚園を訪ねました。この幼稚園は都市の幼稚園としては決して狭い方ではないのでしようが、それでもコバルト色の空が真四角に園舎でくぎられて、お陽さまの姿をほんの僅かの時間しか眺められないという幼稚園であります。

私が訪ねました時は、すでに芋の子を洗うように遊園一杯に子供が登園して来て思い思いに遊んでおりました。遊園が狭くて「何をして遊ぼうかしら？」と思案顔につゝ立つていたB子さんに、「あなたは何組ですか？」とたずねて見ました。B子さんははすかしがりもせず「〇〇組と答えました。」私は続いて「〇〇組で一強い人はどなた？」とたずねて見ますと、「Aさんよ。」

答えてくれました。私は興味を感じ、「それでは〇〇組で一番偉い人はどなた？」ときくと矢張り「Aさん」と。ついで「〇〇組が一番こわい人はどなた。」と、ききますと、すかさず「Aさん」と答えました。私はすつりAさんの興味を持ち「ではそのAさんのところへおばさんをつれて行つて下さい。」とたのむと。所在なさそうにつゝ立つていたB子さんはいそいそと私の手を引いて〇〇組の中へはいつて行きました。うす暗い部屋の片隅で数人の子供たちが、積木遊びと絵本の観察に余念がありませんでした。この群れの中に、広告の紙で三十糶程もあるうと思えるだまし舟を作つたのをもち、リスのよ

うに鋭い瞳をかまやかせ、小犬のように少しもじつとしていないとても元気なのもしい感じのするAさんが交つていました。

私はこゝに都市の子供の代表としてこのAさんの三十分間の行動をありのまま記録して見ようと思えます。それにはきつと都市の子供らしさが伺えます。しよう。

X X X

九・四二分 大きいだまし舟を持つて、友達の前角積み上げた高い塔を足でこわし、机の上で絵本を見ていた四人の友だちの頭をボンボンとたたき、素早く廊下側の窓の敷居の上に猿飛佐助のようにとび上り、炭鉞節を喰い出した。うたい終ると持つていただまし舟をつき出し「これやるワ。お前等ジャンケンせい。勝つた者にやる。」と云つて敷居から飛びおり、一人の友だちに耳うちをし、ジャンケンの仕方を指示したらしい。自分の思うようにジャンケンが

出ないので「もう一回やれ」「もう一回やり直し」と五回ばかりやり直しをさせて耳うちをした友だちにだまし舟を与え、再び敷居の上にとび上り敷居に馬のりになつて又炭鉞節をうたい出した。

五・四七分

二三度両足を振つたかと思うと、とびおりてスキップをして部屋の内を二周し、途中で新聞紙で作つてある帽子を拾つてかぶつてきた。さつきのだまし舟を「かえしてくれ」と大喝して取りもどす。帽子をぬぐ。友だちに「お前のお道具箱はどれじや。これかこれか、」と足で一々道具箱を指して歩く。自分の道具箱を机の上に持ち出して鉄を出す。かぶつていた新聞の帽子をぬいで冠のような形に剪り出した。女の友だち一人男の友だち二人がそれを眺めている。冠にきれたので再びかぶる。机の上の剪り紙屑を両手床の上に落した。床の上紙屑を両手で集めて友だちに

「おいーこれほかしてこい。」と命令する。お道具箱を片付け、帽子を机のひき出しに入れた。机の上に腰をかける。腰かけたまゝ一人の男の友だちと話す。机の上に仰向けにねころぶ。うつむけになる。両足をピンコピンコあげる。首を右に左に振る。両手を大きくまわし。立ち上つて動き出し男の友だちのところへ行く。机にもたれて暫く休息。

九・五三分

「おいこの積木の後片付けをせよ。」とあごで呼びかける。「なんでこんなところへ積木をおいとくのんじや」と、とてもの権幕でおこる。両手さがつてゐる靴下を上にあける。靴をぬぐ。ほかけ舟(だまし舟)を与えた子供にわけもなくおこつて頬を三つたてつゞけにたゞく。左腕をたをたゞく。ちがつたグループの方へ行つて「おい片付けー」と又命令。だまし舟を持つて室外に出、遊園を一周走つて又部屋にはいつて来

ただまし舟を机の上において、「おいまだか。早く片付けんか。」一人の友だちが机の上のだまし舟を一寸さわつた。「おいされつたらいかん」とおこる。机の上にねこるぶ。机のひき出しからさつきの帽子を取り出し眺める。大積木の箱のそばへ行つて片付けている友だちに大喝したので片付けていた友だちは驚いて一瞬直立不動の姿勢をとつたのでシーンとした。「まだまだ積木が足らん早よせい。」「これでよし。この大きい積木の箱はおれ一人で動かす。皆見て——」と、とても重い積木の箱を一人で部屋の隅へ押しに行く。新聞紙の帽子のさきをちぎる。「おい先生がみんなの前で又ほめてくれはるかもわかないからもつと片付け——」「おれ力どんなもんや。まあざつとこんなもんじや。」と云い作らとうく、全部積木を片付けてしまった。遊園からオルガンの音が流れてきた。友だちが「アツ、オルガンがなつて来

た。朝礼や。行こう。」と云つた。すると「ばか行くな。朝礼見たいなものせんでもえうぞ。先生がお片付しなさいと云うていたから。」矢張り〇〇組は頭がいい。」なと愉快に粘土作品のリングをいじる。

一〇・五分

とうく朝礼のすむまで部屋に居た。

x x x

都市の子供は自由に遊ばせておけば、Aさんのように、自然からかけはなれた何となくいらいらした落ちつきのない生活をくりひろげるか、B子さんのようにたゞ手を拱いてぼんやり眺めているだけの生活より出来ないのではありません。

こゝに都市幼稚園の保育や経営の面に想像のつかない苦勞があるのでしよう。

二、都市の幼稚園の保育

都市幼稚園の保育で、現場の人たち

が最も留意しているのは、何と云つても「健康・安全で幸福な生活のために必要な日常の習慣を養い、身体諸機能の調和的発達を図る」ことでありましよう。がしかし、これだけでは充分とは云えないので、更に、身近の社会生活及び事象に対する正しい理解と態度の芽生えを養わねばならないと思ひます。

我が国の人口構成と食糧の關係を考へます時、寒心するものがあります。即ち、どうしても年々歳々二千何百万石かの食糧が不足しし、それを補うために生産を増強し、貿易を盛んにしてその代価で食糧を求めるようにしなければならぬこととなります。又、一方我が国は平和条約の調印締結によつて、他国に随分多くの賠償をしなければなりません。新聞の報じるところによりますと、勤勞による賠償をするとか。

生産増強といふ、賠償といふ、いずれも健康な身体をもととしてしなけ

ればならない事でありまして、しかも戦争に何の關係もない次代の人々までが、その責任を果さなければならぬ立場に立つ關係上、現在保育をしている子供たちの健康については、国策の上からも都市政策の上からもゆるがせに出来ないところでありましよう。

都市の子供は、電車のきしり、自動車の警笛・トラツクの地ひびきなどによつてたえず神経をいらだたせられておりますから、幼稚園に於いてもAさんのように少しも落ちつきません。殊に幼稚園では終日遊んでおりますから、ついつつかりと休息させることを忘れませんが、子供の遊心は反面から見れば立派な働きでありますから、氣をつけないと過勞になるおそれがあります。特に都市においてはまわりから神経をいらだたせられますから、是非休息を保育の大きい部分にしたいものであります。

大阪におきましては、事情の許す限り、疊敷の休息室、或は上敷を利用し

ての休息室をしつらえ、幼児用の毛布をかけて暫く横にならせているのであります。その間静かな音楽をきかせたり、先生のお話にうつとりさせたりすることもあります。僅か十分か十五分位の休息でありますけれど、実に落ちついてよろしいです。

都市におきましては、朝の視診——は子供の健康上実に重要な保育の時間でありまう。

何しろ芋の子を洗うように共同生活をするのでありますから、伝染性の病氣などにかゝると、たちまちひろがりますが、朝の視診で早期に発見しますと、病氣にかゝつてゐる子供も早くよくなりまうし、幼稚園に病氣がひろがらなくてよろしいです。大阪ではこの時を利用して、出席表に奨励印を押し、正しい言葉の指導と、子供とカリキュラムの計画を立てる時に充てゝいて、実に活潑で有意義な一ときを展開してあります。このため各園に看護婦を採用して専門的に視診を行つております。

手洗いの勵行、食後の歯みがきのしつけ、など、日常茶飯事と思われることが実は都会に於いては缺くことの出来ない保健保育でありまして、これが身につくまでの保育者の努力は並大抵ではありませぬ。

いよ／＼都市をあげて生産増強に邁進しようとしてゐる今日、幼い子どもといえどもその線にそつて保育はすゝめられなければならぬと思ひます。

けれども子どもに何が出来ましよう。生産の増強は出来なくても、せめて消費の節約はさせたいものです。

いつかこんな話をきいたことがありますが勿論アメリカの話であります——幼稚園に通つてゐる子供がお父さんにたのんで鶏を飼つていただきました。そして沢山玉子を産ませて、子供自身が隣村に売りに行き、その利益金で自分のクレオンを買い、お父さんやお母さんには迷惑をかけないようになつたと云うことです。

これに似たことがある幼稚園でも

必りました。幼稚園に沢山にわとりを飼ひ、当番をきめてにわとりの世話を子供たちにやらせました。そして生まれた玉子は当番の子供が持つて帰つて翌日のお弁当のお菜に持つて来るという仕組みであります。

子供の力でクレオンが求められたり、お弁当のお菜が出来たりすることは、たしかに消費の節約に關連を持つた生産増強ではありませんか。

共同募金月間に於いても、おやつ代を節約して赤い羽根を買い求める保育から、更に進んで自分の手で製作した木工の電車やトラツクを、粘土で作つた木の葉皿を、厚紙で拵えた鉢々盆を、地域社会に売つてその利益金で赤い羽根を買うなど、たしかに商工都市に相應しい生産保育が展開されています。

大阪では一寸身辺の社会見学に出かけようとしても、そこには必ず安全ということを考えねばならない事柄が沢山横たわつております。先ず、どうして道を横ぎるうか、どうして交叉点を

わたるうか、どうして自動車の洪水の中をきりぬけようか、と苦心しなければなりません。いくら保育者が幼稚園でこれらについての安全訓辭しても駄目です。現場へ出ました時にはおど／＼して結局怪我はないまでも交通の邪魔になることがうまれます。

そこで交通巡査にまていたゞいて、交叉点のわたり方、道の横ぎり方、交通巡査の手の動かし方と行動の實際、などについてのお話をうかがうと同時に、園内で遊びの間にこのくさぐさのしつかけを交通巡査から、子供の得心のゆくまで保育していたゞきます。次いで實際通路に出て行つて、社会の人たちにもまじつて交叉点を渡るのを、道を横ぎるのを指導していたゞいて、身につけていたゞきます。

三、都市と幼稚園の經營

都市の幼稚園になくてはならないのは、手洗場と水のみ場でありましよう。手洗場があつても、不便な場所に、

或は手のとどきかねるところにあればそれは無用の長物でしかないでしよう。又水のみ場のある幼稚園はあまりにも少ないのです。従来は湯槽にお湯を入れていくつかのコップを用意している幼稚園がありました。これは子供の保健上甚だよくない設備であることがわかりました。最近の話ですが――

アメリカではこの湯槽による水のみを廃して、噴水式のみ場を用意し、万一口ツブの要る時には、自分自分のコップを使用して決して共用しないことに改めたので、少見結核がへつたということがあります。もう五年もすれば、アメリカには少見結核が全滅するだろうとアメリカの權威者が云つておられます。この水のみ場を設備して各自のコップを使用するようになつたからでありましよう。

砂ぼこりと煤煙の中に明け暮れず都市幼稚園では、是非ともこの手洗場と水のみ場が必要であるとして、今大阪では大重になつております。

煤煙ですゝけた園舎は商工都市のもつ一つの特徴かもしれませんが、明るい朗かな子供たちの遊ぶ場所としては、如何にもうつとうしいことです。近頃動物園の檻でさえ、美しい色彩でいろどられているので、況んや人間の子供を育てる幼稚園がすゝていていゝものでしょうか。殊に幼児期はすべての基礎が培われる大切な時期です。大阪ではだんだんまわりの建物に調和した明るい色が塗られてまいりました。

園舎が明るく塗られても所詮土一升金一斗の都会では、広い遊び場所を与えることが出来ませんから、どうしても郊外に出かけなければなりません。それにはバスの横づけを利用して出かれます。が、郊外に進出し自然に親しませるための保育者の努力は到底筆墨でつくすことの出来ないものがあります。フレibel先生が、幼児を神の作品である自然に親しませることによつて、神に近ずかせることが出来ると云

つておられますように、いつかは偉大な自然の摂理と敬虔な気分を味わせることが出来るでしょう。

都市に於いては騒音を耳にすることは出来ても、静かな愉快な音楽的な雰囲気にしたることはできません。都会の子供は、小川のせせらぎ、小鳥のさえずり、水車ののどかなリズム等、農村の子供に恵まれていゝような、音楽のオワンスに接することは出来ないのであります。せめて幼稚園で遊んでいる間によい音楽をきかせてやりたいと、大阪市教委では昨年度、ピアノのない幼稚園全部にピアノを配給いたしました。戦災にかゝつてピアノのなくなつた園、新設園のためにピアノの購入出来ていない所に、揃つてとのえられましたから、幼児たちは、それはそれは幸福な一ときを持つことが出来るようになりましたが、更にラジオを通して、レコードによつて楽しい、しばらくを持たせようと、目下、園内放送設備の完備に腐心いたしております。

四、むすび

平和条約の調印もすみ、日本は今、夜明け前の厳肅な空気の中に、すべての文化は押しすゝめられております。都市の幼稚園もこの渦の中にきおい立つて、将来の日本を脊負う優秀な市民に育成するために、保育に、経営に、雄々しく邁進しようではありませんか。

(筆者 大阪府教育指導主事)